私を育てた
あの時代、あの出会い
第6回

「人と人とが真剣に向き合う」恩師が行動で示した教育の本質

東京都 渋谷区立上原中学校校長 大江 近 OE CHIKASHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、大江校長が語る。

おおえ・ちかし　専門教科は社会科、道徳。江東区立第四砂町中学校、江戸川区立篠崎第二中学校、練馬区教育委員会、東京都教育庁指導部指導主事、義務教育心身障害教育指導課長などを経て、2007年より現職。2011年、全日本中学校長会会長に就任。

- 1966（昭和41）
  中学2年時に教わった先生に影響を受け、教師を志す
- 1975（昭和50）
  新採として江東区立第四砂町中学校に赴任
- 1982（昭和57）
  江戸川区立篠崎第二中学校に赴任。小川先生と出会う
- 1989（平成元）
  練馬区教育委員会指導主事に就任
- 1996（平成8）
  東京都教育庁に勤務。以後11年にわたり、特に道徳と人権教育の知見を深める。当時の先輩・仲間とは現在も年1回、宿泊を伴う勉強会で白熱した議論を交わす
- 2007（平成19）
  渋谷区立上原中学校に校長として赴任

教師全員が関わることで生徒は変わっていった

1980年代初め、教職8年目で赴任した中学校では、喫煙や器物破損が日常的に見られました。落ち着いた生徒が多かった前任校とのギャップに戸惑っていた私は、問題行動を厳しく指導しつつ、「この生徒たちと心から向き合うにはどうすべきだろう」と自問していました。

そんな私に教師としての道を示してくれたのが、小川洋先生です。当時40代前半で、生活指導主任を務められていました。背筋を伸ばした毅然とした態度ながら、「おい、元気か？」といつも笑顔で生徒に声を掛ける先生で、どの生徒の話にも分け隔てなく丁寧に耳を傾け、校外でのトラブルにも駆け付けていました。

生徒の誰もが「何があっても、小川先生なら力になってくれる」と信頼していたからでしょう。全校集会で小川先生がマイクを持つと、それまで騒がしかった生徒たちが一斉に静かに前を向くのです。初めてそれを目の当たりにした時、生徒の心をつかむとはこういうことかと、衝撃を受けました。

小川先生は、教師に対しても行動

「教師には、目の前の生徒を伸ばす指導を追究する使命がある」

で範を示しました。毎日のように夜遅くまで残り、壊れた机などを修理されていました。「いかに学校が荒れても、教師が負けてはいけない」という先生の強い気概を、どの教師も感じたのだと思います。ほぼ全員の教師が修理に加わっていました。

修理が深夜に及ぶと、皆疲れて口数が少なくなります。そんな時、小川先生は決まって大きな声でこう言いました。「明日もいい天気！」と。いかに全員の表情に気を配っているかが分かる、絶妙のタイミングでした。不思議なことに、この何気ない一言で元気が出たものです。

小川先生はよく校庭で生徒とサッカーをしていました。授業で向き合うだけでなく、生徒と教師が共に汗を流すことで、互いに理解し合える。我々教師が、もっと生徒に寄り添おう――そんなメッセージが伝わってきました。先生に続く教師は次第に増え、ついには職員室がからになるほど、多くの教師が参加するまでになりました。

教師全員で生徒に関わるという雰囲気は小川先生が異動された後も学校の伝統として残り、少しずつですが確実に、生徒は変わっていきました。問題行動は減り、態度に落ち着きが見られるようになったのです。

率先垂範し、伝え、関わる教師でありたい

私は小川先生から、教育は人と人との関わりであることを学びました。生徒とまっすぐに向き合い、自分が正しいと信じることを伝えていくことで、学校はより良くなり、ひいては平和で健全な社会の構築にもつながると信じています。ただ、意見を言うだけでは、説得力がありません。自ら進んで実践して初めて、他者の心を動かせるのです。

この考えは、校長になってますます強くなりました。生徒となるべく多く接しようと、毎朝8時から校門に立ち、一人ひとりに声を掛けています。掛ける言葉は、小川先生に倣って「おい、元気か？」です。

先生方には、「校長室通信」を毎週の職員打ち合わせで配布。学力向上や生活指導など、学校運営に必要なテーマを選び、校長としての考えを端的に伝えています。部活動の意義と教師の役割について書いた時は、複数の顧問の先生が「取り上げてくれてうれしい」と、喜びの感想を言いに来てくれました。文字を通して先生方との関係を深めるきっかけにもなればと考えています。

私が目指すのは、管理職を含めた教師全員が、どの生徒とも正面から向き合う学校です。先生方には、生徒が良いことをすれば心から褒めてほしいし、問題があれば厳しく叱ってほしい。生徒と真剣に関わってこそ、彼らが何を求めているかが見えてきます。教師には、それに応じた指導を追究する使命があるのです。そうした意識を共有できるよう、校長として、一教師として、呼び掛け続けていきたいと思っています。

「校長室通信」のタイトルは、「ささやき」「つぶやき」「やまびこ」「かたらい」と毎年変え、赴任５年目の11年度は「かかわり」とした。いずれのタイトルにも、「教師が生徒にいかに働き掛けるかを考える」というメッセージを込めている